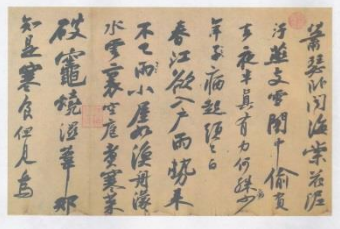


本日、東京国立博物館で開催中の台北國立故宮博物院展を鑑賞した。3時間待ちであったが、読書も出来たので、それほどの苦痛ではなかった。喧伝されている翠玉白菜をはじめ数多の名品を楽しませて貰った。眼福であった。以下幾つかの所見を述べたい。

- 1 入場券には「國立」の語彙があったが、クレームがあつて追加されたようだ。何時まで中国に気を使わねばならぬのか？情けなき限り。
- 2 門外不出であった翠玉白菜をよくぞ出品したものである。台湾の日本に対する想いが伝わってくるのではないか。日本はこれにどう応えるのか？
- 3 支那文化の高さ、奥深さ、そして幾多の戦火を関係者の努力により逃れ得た流転の至宝、よくぞ保存されたことに感嘆。  
日本の神代の時代から支那大陸には世界に冠たる文化があつたことを改めて認識させられた。日本列島には大陸から文化が入ってきた。
- 4 玉器、書や絵画、景德鎮窯・青磁・白磁等々の名品多数をコレクションにした大陸の皇帝の権力は絶大だったのだ。王朝が交代しても、それらが次の王朝・皇帝に引き継がれるに当たってはドラマがあつたのだろう。スムーズに引き継がれた筈はなかろう。
- 5 鑑賞者のマナーも比較的良好だった。日本人の美德である。
- 6 文化を暴虐から如何に守るかは人類共通の課題である。



行書 廣州寒食詩卷 宋 蘇軾 台北故宮博物院藏



翠玉白菜 理夫題 清・18、19世紀



青月守白去 慶示